

報告書（道の駅しんよしとみ再構築に向けた生産者と民間事業者との意見交換）

1. 概要

- (1) 日時 令和8年9月7日（月）9:30-17:50 上毛町役場ほか町内各所
- (2) 参加 生産者8名、事業者1名、行政2名（産業振興課、企画開発課）
- (3) 趣旨

町公式ホームページで公表中の「道の駅しんよしとみ再構築基本構想」に基づき、地域共創による魅力的な拠点づくりを進めるため、民間事業者と地域生産者（農業者等）による意見交換（サウンディング）を実施するもの。

- 事業者：地域資源・課題や生産者の実態を把握し、参入・提案の検討材料とする。
- 生産者：民間事業者の視点や流通・加工等のノウハウに触れ新たな可能性を探る。
- 行政：対話を通じて得られた知見を今後の事業計画や公募条件等への参考とする。

2. 意見交換のまとめ

地域生産者の取組状況をはじめ、道の駅や直売所の課題等について意見交換を行った。各生産者との対話から得られた発言には、以下のような強い共通項が見られた。

(1) 現状への危機感と抜本的な再構築の必要性

現状の産直スタイルではJAや周辺の競合スーパーに太刀打ちできておらず、根本的な改善（再構築）を行わなければ衰退するという強い危機感が共有された。

（生産者意見の抽出）

■「受け身のスタイル」からの脱却

現状のまま何もしないことは、競合環境が激化する中で「現状維持は衰退」を意味するという強い危機感が示された。施設の存続には「前に進む姿、一緒にやろうという姿勢」が不可欠であり、待ちの姿勢から脱却し、生産者と施設が一体となって活気を生み出す環境づくりが求められている。

(2) 目的地化と戦略的マネジメントの導入

道の駅にわざわざ足を運ぶ理由（目的地化）をつくるため、目を引くメインコンテンツや集客の仕掛け、明確な差別化が不可欠である。

（生産者意見の抽出）

■ターゲット設定と立地に合わせた戦略を

「ターゲットは誰か？」「施設の強みは何か？」といった根本的な問いが投げかけられ、単なる産直施設に留まるのではなく、独自の魅力を創出して「明確な差別化・目的地化をしないといけない」との意見が出された。

■民間マインドの経営視点

商品価格が「高いほうが売れている（安売りは経営ではない）」との声に代表され

るように、利益を追求する民間マインドの重要性が指摘された。

また、「売上の高い商品等を看板として注力し、集客したほうがいい」「データやネットを活用したコミュニケーションを導入すべき」など、利便性の向上や、勘や慣例に頼らないデータに基づく合理的な店舗運営（VMD等）が期待されている。

■集客のフックとなる「メインコンテンツ」の創出

大ノ瀬官衙遺跡といった地域資源について、「大ノ瀬官衙遺跡の空間がよい」「大ノ瀬官衙遺跡と連携してキャンプや収穫体験」など、空間を活かした体験型コンテンツへの期待が高い。「フードコーナーもっと充実を」との指摘もあり、「何かメインとなるコンテンツが必要」で、それらが集客の核となると考えられる。

(3) 事業推進体制と現場を牽引する人材

本気で施設を良くしようとする牽引者や、利益を追求する民間マインドが求められている。同時に、従業員の意識改革や教育の必要性も指摘された。

（生産者意見の抽出）

■「本気で良くしようとする人」「風を吹かせてくれる人材」

「結局は組織体の強さ、人事・人材という話になる」との意見のとおり、事業を牽引する強力なリーダーシップが求められている。新しい仕組みを理解し、「民間との歩み寄りのスタンスが必要」という前提のもと、「日々勉強する姿勢」で現場のスタッフや生産者を牽引できる人材の確保が再構築の鍵となる。

(4) 持続可能な生産体制と「出口戦略」の構築

川底柿（干し柿等）やレモンなどの地域資源には可能性があるものの、加工から販売拡大までのプロセスにおいて、農家単独では様々な課題（コストや手間など）があることが浮き彫りになった。そのため、専門家（事業者）によるノウハウの提供や行政の支援など、関係者が連携した出口戦略の検討が必要である。

（生産者意見の抽出）

■民間ノウハウ導入と関係者連携による「出口戦略が必要である」

レモンや川底柿といった特産品について、「品質担保（栽培管理）が必要」であり、「干し柿の生産を拡大するには農家だけでは困難」など、生産から加工・販売に至るプロセスにおいて農家単独での展開には課題がある。

そのため、事業者によるノウハウ提供（マーケティング、B級品の加工活用など）をはじめ、関係者が連携し、地域資源を確実に利益に繋げるための体制構築（出口戦略）が求められている。

また、「頑張っている若者がいる」「年間の作付け・出荷計画をつくることも可能」などの情報提供もあり、意欲ある生産者を支援し伸ばしていくといった持続可能な仕組みづくりも重要である。